正倉院聖語蔵本，曇無讖訳『悲華経』に見られる朱筆の書き入れについて*

石上　和敬

はじめに

Karuṇāpuṇḍarīka（以下，＜悲華経＞[1]）には二種類の漢訳が現存しているが[2]，そのうちの一本，曇無讖訳『悲華経』十巻（以下，曇訳）が，平安期以降日本において広く受容されたこと，また，曇訳の巻六・七・八に含まれる釈迦如来の五百誓願と呼ばれる部分について，その内容に基づきながら編集増広を加えた『釈迦如来五百大願（経）』と称される典籍が存在し，やはり平安期から一定の影響力を有していたことは，これまでに幾人かの先学により明らかにされてきた[3]．本稿は，近年ＣＤ－ＲＯＭ化によって披見の機会を恵まれた，正倉院聖語蔵に含まれる曇訳（以下，聖語蔵本曇訳）[4]を検討し，特にそこに見られる朱筆の書き入れの分析を通して浮かび上がってきた，『釈迦如来五百大願』に関する新知見を紹介するものである．それによって，未だ全貌が明らかにされたとは云い難い『釈迦如来五百大願』の実態解明に，ささやかな寄与が行なえれば幸いである．

本論に入る前に，＜悲華経＞全体の概要と，そのなかでも特に，本稿が扱う中心部分である釈迦仏の五百誓願について簡単に紹介する．＜悲華経＞は，阿弥陀仏等の浄土を選び取る諸仏に対して，穢土成仏を誓う釈迦仏（その前身の寶海）こそが大悲を具えた真の菩薩であることを主張することを本旨としており，浄土を選び取る諸仏と穢土成仏を誓う釈迦仏とを対比的に配する経典である．＜悲華経＞では，それらの諸仏の優劣は，彼らが菩薩の時点で起こす誓願によって比較されるという体裁を取っているため，釈迦仏が菩薩の段階で起こすいわゆる五百誓願こそは，同経の中で最も重要な箇所と言って過言でない．他の仏典には類を見ない，この釈迦仏の五百誓願の内容は，実は，過去世から未来世に及ぶ釈迦の壮大な仏伝と見なすことができるものであり，また，随所に＜無量寿経＞等の阿弥陀仏の誓願を髣髴させる内容を含むことも特徴の一つである[5]．なお，＜悲華経＞諸本では，釈迦仏のこの誓願の数を「五百願」と明示しているが，実際に各願文ごとに区切っ

---

* 本稿は，2009 年 11 月 14 日に，国際仏教学大学院大学で開催された文部科学省私立大学学術研究高度化推進事業・学術フロンティア「奈良平安古写経研究拠点の形成」の第３回公開研究会にて発表した内容に基づいている．

[1] ＜悲華経＞という表示は，本稿では，梵本 *Karuṇāpuṇḍarīka*（Yamada[1968]）の内容を指す．なお，梵蔵漢は概ね一致する．

[2] 二種類の漢訳とは，本稿で取り上げる曇無讖訳『悲華経』十巻（「大正蔵」第三巻，167a-233c）と，訳者不明で秦代の訳出とされる『大乗悲分陀利経』八巻（「大正蔵」第三巻，233c-289a）である．なお，＜悲華経＞の梵蔵漢資料の詳細については，石上和敬 [2009]; 石上和敬 [2010] を参照．

[3] 代表的な研究として，野村卓美 [2005] がある．なお，桐野好覚 [1998] に関連研究がまとめられており，有益である．他に筆者も，石上和敬 [1998]；石上和敬 [2001] 等を発表した．

[4] カラーＣＤ－ＲＯＭ版「宮内庁正倉院事務所所蔵　聖語蔵経巻」第２期　天平１２年御願経１（丸善，2001）．通巻 No. 285-294．同ＣＤ－ＲＯＭの閲覧に際しては，落合俊典・国際仏教学大学院大学教授のご高配に与った．記して謝意を表したい．

[5] ＜悲華経＞梵本の釈迦如来五百誓願については，石上和敬 [1999] などを参照．

た場合の総数は到底五百には及ばない．さらに，釈迦仏の五百誓願は，＜無量寿経＞の阿弥陀仏のいわゆる四十八願のようには各願文ごとの区切りが明瞭でないため，実際の願数の算定は容易でない．この二点は留意されるべきである．

さて，＜悲華経＞の五百誓願についての概要は上記の通りであるが，平安末期以降，曇訳の五百誓願の内容に拠りながら，各願文ごとの区切りを明瞭に示し，さらに，願番号を付し，さらには，曇訳の内容を補う形で編者が編集・増広を加えて総数五百の誓願にまとめ上げたと推定される『釈迦如来五百大願』（以下，「五百大願」）という典籍が存在・流布したことが知られている[6]．この「五百大願」の完本としては，京都の栂尾山高山寺に伝来した二本の写本が知られるのみであるが，現在のところ，そのうち，比較的書写状態のよい一本（嘉禎三年 (一二三七年) 明行尼の書写．分類番号（重書１８）．現物は東京国立博物館に寄託中）を翻刻したものが「五百大願」研究の底本となっている[7]．この他に，「五百大願」は，平安末期以降，他の文献にも数多く引用・言及されており，それらの間接資料も「五百大願」研究には貴重な情報を提供している[8]．

以上，先行研究に拠りながら，曇訳と「五百大願」の概要を簡単にまとめてみた．

第１項　聖語蔵本曇訳の釈迦五百誓願に見られる朱筆の書き入れ

それでは，聖語蔵本曇訳の全巻を披見することから得られた新たな情報を紹介してみたい[9]．

一際注目されるのは，聖語蔵本曇訳の釈迦仏の五百誓願の一部に相当する，巻六の中ほどから巻七の中ほどにかけて[10]，「五百大願」を参照したかの如く，各願文の願番号などが，朱筆で書き入れられていることである．その書き入れは，願番号のみが，「第一願」「第二願」として，各願文の冒頭に当たると思量された文字の右傍に書き入れられている．

---

[6] 「五百大願」が平安末期以降に流布したことは確認できるが，その成立時期や成立地の詳細については現時点では不明である．なお，「五百大願」の編纂過程で，いかなる文献が参照されたかという問題（たとえば，＜悲華経＞のもう一本の漢訳である秦訳が参照されたか，否か），また，増広改変の諸特徴についても，多くは今後の課題として残されている．なお，筆者は「五百大願」の編纂過程での鳩摩羅什訳『法華経』の影響等を指摘したことがある（石上和敬 [1998]）．

[7] 翻刻研究には末木文美士 [2001]〜[2004] と成田貞観 [1979] の二つがあるが，前者は高山寺伝来のもう一本の写本（分類は「聖教類・第四部」）との異読も示しているなど，後者よりも至便，精確であり，今後の「五百大願」研究は前者に拠るべきである．また，曇訳と「五百大願」との各願文ごとの内容的な比較対照については，末木文美士 [2005] が参照されるべきである．

[8] たとえば，野村卓美 [2005]；池上洵一 [1997]；牧野和夫 [1988] などを参照．

[9] ＣＤ－ＲＯＭ版のみの参照のため，書誌情報の確認は今後の課題としたいが，巻七以外の各巻末に天平十二年御願経に標準的な，下記の願文が見られる．この点，杉本一樹 [1985] を参照．なお，『正倉院御物聖語蔵一切経目録』上巻（『昭和法宝総目録』第一巻，大正新脩大蔵経別巻，949b, 1929）に，曇訳の各巻毎の書誌情報がまとめられている．ただし，同目録によれば，巻七にも「御願文同前」とあるが，ＣＲ－ＲＯＭ版では確認できない．「皇后藤原氏光明子奉為尊考贈正一位太政大臣婦君尊妣贈従一位橘氏太夫人敬写一切経論及律荘厳既了伏願憑斯勝因奉資冥助永庇菩提之樹長遊般若之津又願上奉　聖朝恒延福寿下及寮悉共尽忠節又光明子自発誓言弘済沈淪勤除煩障妙窮諸法早契菩提乃至伝燈無窮流布天下聞名持巻獲福消災一切迷方会帰覚路　天平十二年五月一日記」（巻ごとに若干の写誤を含む場合もあるが，異読の注記は省略する）．

[10] 「大正蔵」の範囲でいえば，およそ (205a23-211b26) に相当．

願番号は，「第一願」から，途中，一部省略・重複などもあるが，「第三百二十八願」まで続いている．（朱筆の書き入れ位置と朱筆された願番号や補入文字等の詳細については，本稿末の一覧表を参照）．この聖語蔵本曇訳に見られる朱筆の書き入れについては，書き入れの意図，書き入れ者，書き入れの年代等について，聖語蔵本曇訳本体からは，参考になる情報は得られない[11]．

書き入れ者や書き入れの時期等が不明であることから，我々は，書き入れの内容自体の分析から始めざるを得ないのであるが，その中で第一に注目されるのは，この朱筆の書き入れが，高山寺本「五百大願」タイプの典籍を参照しながらなされたことが確実である，ということである．その理由として，たとえば，曇訳において「乃至」等の文言によって詳細を省略している箇所を，高山寺本「五百大願」では曇訳で省略されたと考えられる内容を忖度し，補いながら願文を増広させている箇所が随所に見られるのであるが，聖語蔵本曇訳の朱筆においても，高山寺本タイプの「五百大願」の内容を承けた書き入れになっていることが挙げられる．換言すれば，聖語蔵本曇訳の朱筆は，曇訳のみに基づいたのでは不可能な書き入れなのであり，他の史料，おそらくは高山寺本タイプの「五百大願」を参照しつつ，朱筆が書き入れられたことが明らかなのである．

以下に，この点を具体例を挙げて確認してみよう．まず，曇訳と「五百大願」との対応を見ることにする．曇訳の五百誓願中に次のような誓願がある．

「事日月梵天，亦願化爲日月梵身．而教化之，令住善法．有事金翅鳥，乃至事兎，願化爲兎身，隨而教化令住善法」（大正蔵，205c29-206a2）

（日・月・梵天につかえ，また，願わくは，日・月・梵天の姿を取って，彼らを教化し，善き教えに住せしめたい．金翅鳥につかえ，乃至，兎につかえ，願わくは，兎の姿を取って，〔兎を〕教化し，善き教えに住せしめたい）

この箇所に対応する高山寺本「五百大願」[12]は次の通りである．

「第三十一願　我未來行菩薩道時　若有衆生事日天子者　亦願化爲日天子形　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺

第三十二願　我未來行菩薩道時　若有衆生事月天子者　亦願化爲月天子身　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺

第三十三願　我未來行菩薩道時　若有衆生事梵天者　亦願化爲梵天之身　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺

第三十四願　我未來行菩薩道時　若有衆生事天帝釋　亦願化爲天帝釋之身　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺

---

[11] この点，巻六，巻七からは参考になる情報は得られないが，巻一の巻尾に「一校佐」「二校阿刀□」，巻三の巻尾に「一校田部第成　正了」「二校川原　正了」，巻五の巻尾に「一校工石」の文字が見える点は注記しておきたい（いずれも墨書．また，修復等のため，判読できる文字は一部のみ．なお，先述の『正倉院御物聖語蔵一切経目録』の当該箇所も参照）．聖語蔵本曇訳の各巻本文には，随所に朱筆で字句の訂正が施されており（本稿補記を参照），それらの訂正がこれらの校合者の情報と関係する可能性もある．今後の課題としたい．

[12] 本稿における高山寺本「五百大願」の引用は，末木文美士 [2001]〜[2004] による．なお，引用文中の空きスペースは筆者が便宜上付けたものである．また，一部，表記を統一・変更した箇所がある（例：「若不爾者」．「無」）

第三十五願　我未來行菩薩道時　若有衆生事金翅鳥　亦願化爲金翅鳥身　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺

第三十六願　我未來行菩薩道時　若有衆生事四天王　亦願化爲四天王身　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺

（～以下，第三十七願は「藥（夜）叉」，第三十八願は「乾闥波」，第三十九願は「阿修羅」，第四十願は「緊（賢）那羅王」，第四十一願は「摩睺羅伽」，第四十二願は「執金剛神」，第四十三願は「威徳大神」，第四十四願は「諸鬼神」，第四十五願は「五通仙」，第四十六願は「師子等」となるが，固有名詞以外の内容はほぼ同様なので，全文掲載は省略）

第四十七願　我未來行菩薩道時　若有衆生事兎　亦願化爲兎身　而教化之令住善法　若不爾者不成正覺」

このように，曇訳には「日・月・梵天」，及び，「金翅鳥」と「兎」しか登場しないのであるが，これに対応する「五百大願」では，曇訳で「乃至」とある箇所等を増補して，「天帝釋」，「四天王」，「藥（夜）叉」から「師子等」まで，全十二項目，十二願分を補っている．

さて，聖語蔵本曇訳の書き入れであるが，「事日月梵天」の「事」の右傍に「第三十一願」，「月」の右傍に「第三十二願」，「梵」の右傍に「第三十三願」と各々朱筆で書き入れがあり，さらに，次の行の上欄外に朱筆で「第三十四天帝尺（ママ）身」の書き入れがある．これは，高山寺本「五百大願」の第三十四願に見られる「天帝釋」の語が曇訳には見られないため，朱筆によって上欄外に補ったものであろう．また，「鳥」の右傍にも朱筆で「第三十六四天王身」の書き入れがあり，これも，前者同様，高山寺本「五百大願」には見られるが曇訳には存しない「四天王」の語が朱筆で補われたものであろう．さらに，「隨而教化」の下欄外に「第三十六以下十二」の朱筆の書き入れがあるが，これも，高山寺本「五百大願」の第三十六願「四天王」から第四十六願「師子等」までが曇訳には見られないため，朱筆にてコメントを付したものであることは間違いない．（図 1）

この一事例からだけでも，聖語蔵本曇訳の五百誓願部分の朱筆の書き入れは，曇訳のみに基づいて願文を順番に区切ったものではなく，高山寺本「五百大願」タイプの他文献を参照しながら書き入れられたものであることは明白であろう．これが聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れから得られる第一の知見である．

第２項　聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れと高山寺本「五百大願」との関係

さて，聖語蔵本曇訳に朱筆で書き入れられた願番号と，高山寺本「五百大願」の願番号との内容的な対応であるが，両者は概ね一致しているものの，一部，一致しない箇所も見出せる．ここまで「高山寺本『五百大願』タイプ」と表記して「タイプ」の語を付してきた理由もそこにある．一致しない具体例を少し確認してみたい．

曇訳に

「處在宮殿，妻子綵女五欲之中共相娛樂，見其過患，夜半出城，除諸瓔珞嚴身之具」（大正蔵，207c8-10）

（宮殿に住まい，妻子や綵女と五欲の中でお互いに楽しむが，その過ちを見て，夜半

に城を出て，もろもろの瓔珞や装身具を外した.）

とある箇所で，聖語蔵本曇訳の朱筆は，「處在宮殿」の「處」の右傍に「第一百願」とあり，「見其過患」の「見」の右傍に「第一百一願」と書き入れがある．一方，高山寺本「五百大願」の対応箇所は次のようになっている．

第一百願　我未來滿菩薩行將成佛時　我童子時　所示現之種種伎術世間希有他人所不及也　令一切衆生見之　令住三乗不退地中　若不爾者不成正覺

第一百一願　我未來滿菩薩行將成佛時　爲化衆生故示現處在宮殿妻子婇女五欲之中共相娛樂　若不爾者不成正覺

第一百二願　我未來滿菩薩行將成佛時　示現處在宮殿妻子婬女娛樂之相　一切衆生令得見之　即住三乗不退轉地　若不爾者不成正覺　　經文不分明今只取意矣[13]

第一百三願　我未來滿菩薩行將成佛時　我雖處在宮殿妻子婬女娛樂遊戯　見其過惡夜半出城除諸瓔珞嚴身之具　若不爾者不成正覺

ここでは，聖語蔵本曇訳の朱筆で「第一百願」とされる「處在宮殿，妻子綵女五欲之中共相娛樂」に相当する内容は，高山寺本「五百大願」では「第一百一願」または「第一百二願」であり，聖語蔵本曇訳の朱筆で「第一百一願」とされる「見其過患，夜半出城，除諸瓔珞嚴身之具」に相当する内容は，高山寺本「五百大願」では「第一百三願」に対応している．このような不一致の事例は，数え方にもよるが，二十願以上にも及ぶ[14]．なお，この事例のようにいったんは聖語蔵本曇訳の朱筆と高山寺本とで願番号がずれる事例も，大概は，その後にあたかも調整が施されたかのように再び一致することになり，したがって，全体としては概ね一致していると見ることを可能にしている．

以上，確認できたことは，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れが参考にしたと推定される文献は，高山寺本「五百大願」とほぼ同様な文献でありつつも，現在知られている高山寺本二写本とは細部において一致しない内容を含む，別本である可能性が高いということである．これが聖語蔵本曇訳の朱筆から得られる第二の知見である．

第３項　聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れが参考にした文献について

前述の通り，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れが「いつ，どこで，誰によって」成されたものかについては，聖語蔵本曇訳自体から直接得られる情報は現時点では確認できない[15]．

---

[13] この「経文不分明今只取意矣」の文言は，「五百大願」本文ではなく，補足的な書き入れのようなものである．「五百大願」には，このような補足的な書き入れが，何箇所か見られるが，誰の手によるものか，それを知る手掛かりはない．

[14] 聖語蔵本曇訳への朱筆の願番号から見て，高山寺本「五百大願」の対応願が明らかにずれている主な願は次の通り．１００～１０６，１１１～１１３，２９８～３１４など．なお，「大正蔵」は曇訳の編纂過程において，聖語蔵本曇訳をも対校しているので，「大正蔵」編纂の時点で校訂者は曇訳の朱筆の書き入れについてどのように考えたのか，また，それについて何らかの記録を残していないのか，等々は詮索する価値があるかもしれない．

[15] 「大正蔵」は曇訳の編纂過程において，聖語蔵本曇訳をも対校しているので，大正蔵編纂の時点で校訂者は曇訳の朱筆の書き入れについてどのように考えたのか，また，それについて何らかの記録を残していないのか，等々は詮索する価値があるかもしれない．

ところで，南都の仏教において，＜悲華経＞や「五百大願」が特に釈迦信仰，舎利信仰の観点から重要視されたのではないか，という指摘をはじめ，＜悲華経＞や「五百大願」と南都の仏教については，そのつながりの深さが先学により数々指摘されている[16]．ここでは，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れの背景を考察するために，南都の仏教の中でも，聖語蔵を伝承した東大寺が所蔵する史料であり，＜悲華経＞とも関連の深い『釈迦如来釈』[17]という文献に注目してみたい．

東大寺図書館所蔵の『釈迦如来釈』は「他に伝本の所在を知らない天下の孤本」（池上洵一 [1997: 111]）とされ，奥書によれば長承三年（1134 年）に書写されたものである．内容は，多くの経論からの引用や要約を集成・編集した，一種の仏伝であるが，その中に，曇訳『悲華経』や高山寺本タイプの「五百大願」からの要約や，場合によってはそのままの形での引用がまとまって見られる[18]．具体例を少し見てみよう．

『釈迦如来釈』

一百卌云，諸鬼神，於我法中，得四聖諦，～

一百卌一云，諸龍阿修羅畜生，於我法中，受八戒浄修梵行，～

この部分に対応する高山寺本「五百大願」は次の通り．

第一百四十願　我未來成正覺已　願諸人天及諸鬼神於我法中　得四聖諦　若不爾者不成正覺.

第一百四十一願　我未來成正覺已　諸龍阿修羅及餘畜生於我法中　受持八戒浄修梵行若不爾者不成正覺.

このように，『釈迦如来釈』には高山寺本「五百大願」を要約した形で願文が引用されている．『釈迦如来釈』において「五百大願」の願番号を挙げて引用されているのは，第２２，４８，４９，５０，５２，７１，７４，７６，８３，１３２，１３８，１４０，１４１，１４７，１４９，１５５，３０６，３４７，３７２，４１７，４４８，４５５の各願である[19]．両史料の願番号とその内容は上例のように概ね一致しているのだが，数例ではあるが，『釈迦如来釈』の願番号と高山寺本「五百大願」の願番号とが一致しない事例が見られる．不一致の事例のうち，本稿の趣旨に鑑み，聖語蔵本曇訳に朱筆で書き入れられている「第三百二十八願」までの諸願に限ると，『釈迦如来釈』に引用される「一百卌云」と「三百六云」の二箇所が高山寺本「五百大願」の対応願と若干の相違が見られる．それぞれ両史料と比較しつつ確認してみよう．

『釈迦如来釈』

---

[16] 成田貞観 [1963]（その他，成田氏の関連研究については，野村卓美 [2005: 269] 参照）；蓑輪顕量 [1999: 467] 等

[17] 『釈迦如来釈』については，池上洵一 [1997] にその概要とともに，翻刻が紹介されている．『釈迦如来釈』の本稿における引用，及び関連情報は，断わらない限り，池上論文に拠る．なお，筆者は『釈迦如来釈』の原本の複写を東大寺図書館のご好意により参照することができた．記して謝意を表したい．

[18] 野村卓美 [2005: 275] によれば，高山寺本タイプの「五百大願」が言及される年代の上限は，この長承三年（1134 年）とされている．

[19] 高山寺本「五百大願」の複数の願を要約して『釈迦如来釈』では一つの願文としているケースも見られるが，ここに挙げた数字は，『釈迦如来釈』に示される願番号である．

一百卌九云　我身諸毛孔，日々常有諸化佛出，相好荘厳，如是化佛遣至有佛無佛及五濁界，広作仏事　～.

高山寺本「五百大願」

第一百四十八願　我未來成正覺已　一切有身諸毛孔日日常有諸化佛出　三十二相瓔珞其身　八十隨好次第荘嚴　若不爾者不成正覺

第一百四十九願　我未來成正覺已　如是化佛從諸毛孔出　我當遣至無佛世界有佛世界及五濁界　荘嚴作佛事　若不爾者不成正覺

このように，『釈迦如来釈』で「一百卌九云」とされているものが，高山寺本「五百大願」では「第一百四十九願」だけでなく，「相好荘嚴」の句を含むことによって，直前の「第一百四十八願」をも含んでいるということになる[20]．『釈迦如来釈』では，高山寺本で複数の願文に相当する内容を一つの願文にまとめる場合，通例，最初の（＝数字の若い）願番号を挙げることが多いので，その点で，両史料の不一致事例と見なしてよい事例ではあるが，内容的に高山寺本の「第一百四十八願」と「第一百四十九願」は重なってもいるので，それほど不一致を過大視すべきではないかもしれない．なお，ここの箇所は，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れは高山寺本「五百大願」の願番号と一致している．

次に，「三百六云」であるが，『釈迦如来釈』では，

三百六云，若衆生犯十善戒，我当安不殺等，～

とあるが，高山寺本「五百大願」の対応箇所は，次の通りである．

第三百六願　我未來成正覺已　若有衆生學聲聞乘　未種善根願求諸佛以爲其師　我當安止於三歸依　然後勸令住六波羅蜜　若不爾者不成正覺

第三百七願　我未來成正覺已　若有衆生喜爲殺害　我當安止於不殺中　若不爾者不成正覺

高山寺本「五百大願」では，「第三百七願」以降，十善戒にほぼ相当する各願が続いているが，少なくとも，「第三百六願」は『釈迦如来釈』のいう「若衆生犯十善戒～」とは重ならない．『釈迦如来釈』が「三百七云」と写すべきところを誤写したとも考えられるが，ここで，注目したいのは，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れである．実は，この箇所，聖語蔵本曇訳では，「若有衆生，喜爲殺害　我當安止於不殺中」（大正蔵，211a27-28）という箇所の冒頭の「若」の右傍に「第三百六願」として朱筆の書き入れがある．つまり，高山寺本「五百大願」と聖語蔵本曇訳の朱筆は一願分，願番号がずれているのであるが，ずれている聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れが，期せずして『釈迦如来釈』の願番号と一致しているのである．（図 2；図 3）．なお，『釈迦如来釈』に願番号とともに引用され，聖語蔵本曇訳の朱筆も確認される他の引用願では，聖語蔵本曇訳の朱筆と高山寺本の願番号とが基本的に一致しているため，本検討の参考にはならない[21]．

ここまでの『釈迦如来釈』「第三百六云」に関わる議論を整理しておきたい．聖語蔵本

[20] この点，野村卓美 [2005: 275] も参照．

[21] また，『釈迦如来釈』に引用される「五百大願」の願番号が，高山寺本「五百大願」とずれている事例は本文中で紹介した２ヶ所以外にも見られるが，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れが存在しない第三百二十九願以降の願であるので，本稿の趣旨に鑑み，検討対象から除外する．

曇訳の朱筆「第三百六願」の願番号が，高山寺本「五百誓願」とは一願分ずれていながら，東大寺に伝来した『釈迦如来釈』とは一致している．ここで次のような推定も可能ではないか．聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れが参照した「五百大願」と，『釈迦如来釈』が参照した「五百大願」が同一系統で，それは高山寺本「五百大願」とは異なる系統に属するものではないか，と．この点，聖語蔵本と『釈迦如来釈』がいずれも東大寺に伝承された史料であり，京都の高山寺とは地理的に離れていることも，この推定に不利には働かないであろう．ただ，この仮説を承認するためには，特に朱筆の書き入れ者，書き入れ時期等において，いくつもの仮定を重ねる必要があり，また，仮説の根拠となる事例数が１件に過ぎないこともあるため，本稿においては，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れ，高山寺本「五百大願」，そして『釈迦如来釈』の引用，この三者において興味深い対応関係が見られることを指摘するに止めておきたい．

補記　聖語蔵本曇訳に関するその他の情報

次に，聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れに関連して，次の点を補足しておきたい．聖語蔵本曇訳には，本文に対してやはり朱筆で字句の補正を施した箇所が見受けられる[22]．この朱筆による補正とこれまで見てきた「五百大願」に関連する朱筆の書き入れが，同一人の筆になるものかどうか俄かには判じ難いが[23]，もし，同一人によるものであれば，字句の補正を分析することにより，「五百大願」関連の書き入れに関しても，参考になる情報が得られる可能性がゼロではない．この点に関しては，筆者はＣＤ－ＲＯＭ版のみの参照であり，原本を参照できていないこともあり，結論的にも有益な情報は得られないのだが，次の事実を報告しておく．

聖語蔵本曇訳の「五百大願」関連の朱筆の書き入れ部分（大正蔵，205a23-211b26）に範囲を限定すると，二十箇所ほど朱筆によって本文の字句に補正が施されているが，それらは明らかな写誤と思われる字句を，現存諸本が一致して支持する読みに補正したものが多い．したがって，補正に際して参照された史料が，いかなる系統の曇訳に属するかについては，ほとんど有益な情報は得られないといってよい．数例挙げるとすれば，次の通りである[24]．（下線部が補正される字句）．「命種善根」→「令種善根」(205c14)，「種善相故」→「種善根故」(205c19)，「阿耨多罪三藐三菩提」→「阿耨多羅三藐三菩提」(206a15)．今後，聖語蔵本曇訳全体の朱筆による字句の補正を検討することによって，補正の際に参照された史料について，何らかの情報が得られるかもしれないが，それは今後の課題とし

[22] 本稿の（注１１）参照．この他に，聖語蔵本曇訳には，補正した字句を記した紙を，本文の訂正したい字句の右傍に貼り付けて補正を施したと推測される例も見られる．本稿の（注１１）で紹介した，巻尾に「一校」「二校」とある点とこれらの補正との関係は興味深い問題であるが，現時点では，検討を重ねるための情報を得られていない．

[23] 筆の太さ，朱墨の濃淡は明らかに異なるようであるが，同一人が筆と朱墨を変えて異なる時期に書き入れた可能性も排除できないので，断定はできまい．

[24] なお，例外的に，他の諸本とは異なる読みに補正する事例がある．たとえば，「互相軽慢」(206b29)は，諸本一致して「互」の読みを取るが，敢えて別の文字に補正している．また，曇訳で「惺（または配）悟一切衆生」(210c28) とあるところ，聖語蔵本本文も，補正された字句も，いずれも，曇訳諸本と異なる字句となっている．

ておきたい．

結論

本稿で確認できた点は次の三点である．

1) 聖語蔵本曇訳の釈迦五百誓願部分に見られる朱筆の書き入れは，高山寺本タイプの「五百大願」を参照しながらなされたものである．このことは，時代は限定できないものの，高山寺本タイプの「五百大願」の影響力の大きさを物語る一事例と見ることができよう．
2) 聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れにおいて参照された史料は，現存の高山寺本「五百大願」二写本と概ね一致するものの，願番号がずれている箇所も散見される．このことは，高山寺本とは異なる系統の「五百大願」が存在した可能性を示唆するものである．
3) 聖語蔵本曇訳の「五百大願」関連の朱筆の書き入れと，東大寺図書館蔵『釈迦如来釈』に引用される「五百大願」との関係において，注目すべき近接関係が確認された．

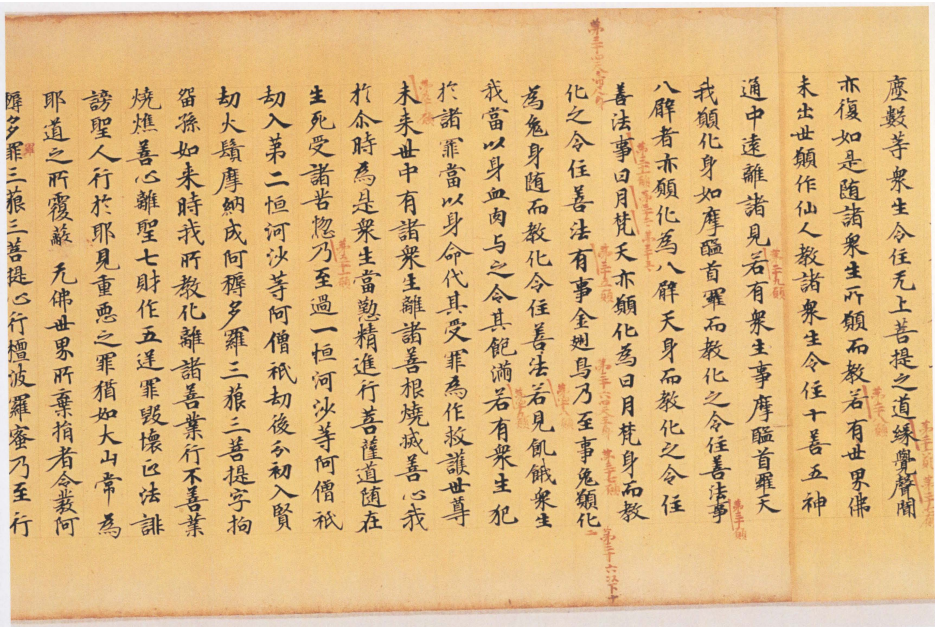

図 1　聖語蔵本曇訳，巻六

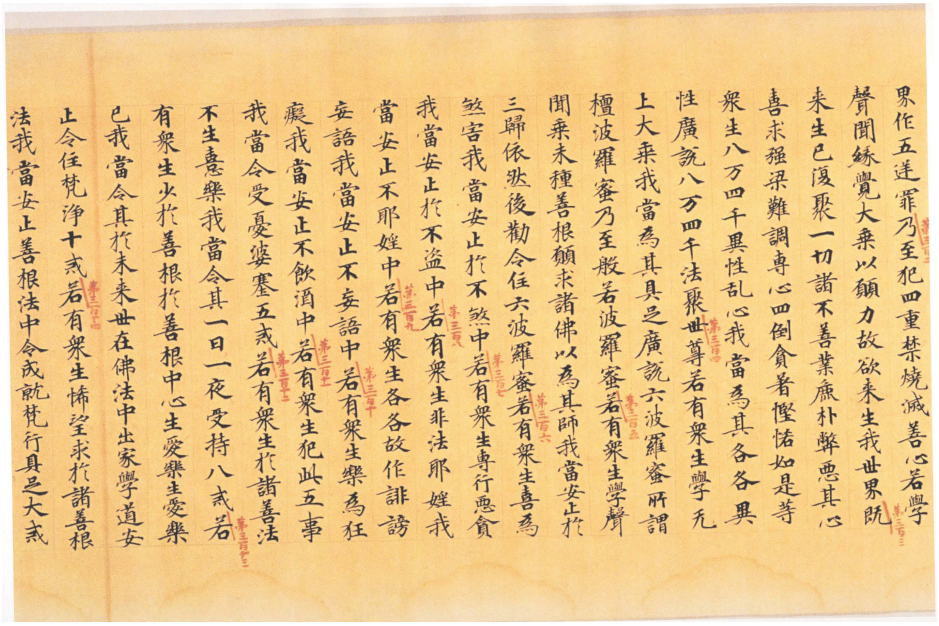

図 2　聖語蔵本曇訳，巻七

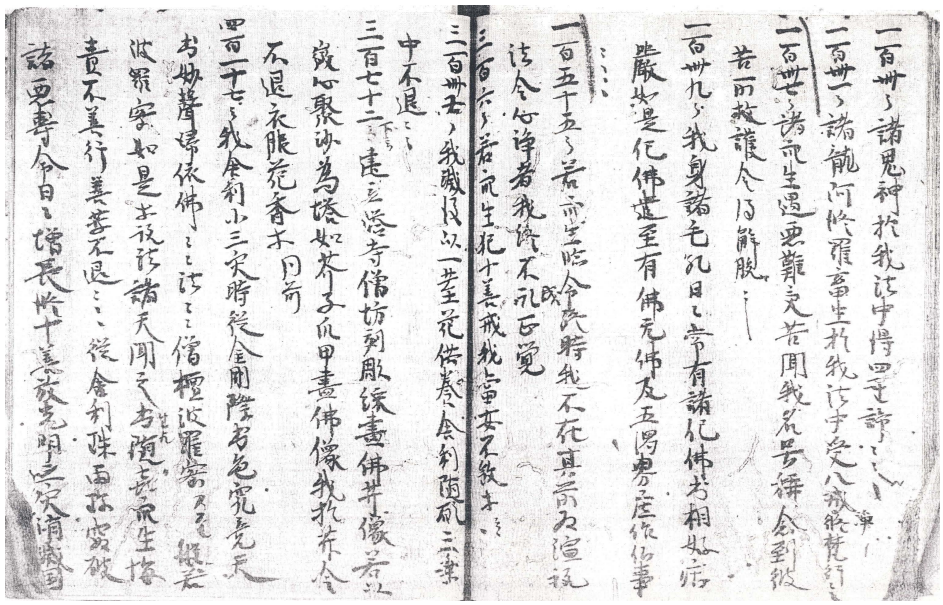

図 3　東大寺図書館蔵『釈迦如来釈』

図表　聖語蔵本曇訳の朱筆の書き入れ位置と書き入れ内容一覧

①．聖語蔵本曇訳における朱筆の願番号の書き入れ．「1」の表示は「第一願」ということ．

②．①の書き入れの位置を大正蔵の位置によって示す．「205a23　我」とは，大正蔵の205頁上段23行目にある「我」の右傍に①の書き入れがあることを示す．同行に同じ文字が複数ある場合には（1），（2）で示す．

③．備考　本対照表の下部に注記として示す．注記における（？）は，その直前文字の解釈が確定できていないことを示す．なお，「＊」は，②で示される文字の右傍に，多くの事例では，書き入れ位置を明確にするために斜線が施されているが，その斜線を欠く事例．

④．②で示された文字から始まる曇訳の内容に対応する「五百大願」の願数．但し，曇訳と「五百大願」は厳密に対応していない箇所も多いので，あくまで参考として示す．「?」は対応が特に明瞭ではない箇所．また，曇訳で「乃至」とある箇所を「五百大願」で分立した場合なども対応願に含めた．

①	②		③	④
1	205a23	我		1
2	205b1	雖		2
3	205b2	若		3
4	205b7	我		4
5	205b10	我		5
6	205b13	我		6
7	205b15	觀		7
8	205b17	觀		8
9	205b20	若		9
10	205b21	若		10
11	205b22	我		11
12	205c1	我		12
13	205c3	我		13
14	205c6	有		14
15	205c10	我		15
16	205c12	畜		16
17	205c12	餓		17
18	205c12	及		18
19	205c12	卑		19
20	205c13	若		20
21	205c14	乃		21
22	205c17	如		22
23	205c19	以		23
24	205c20	亦		24
25	205c22	於		25
26	205c23	縁		26

①	②		③	④
27	205c24	聲		27
28	205c24	若		28
29	205c26	若		29
30	205c28	事		30
31	205c29	事		31
32	205c29	月		32
33	205c29	梵		33
34			注1	
35	206a1	有		35
36			注2	
37	206a2	事兔	＊	47
			注3	37～46
48	206a3	若		48
49	206a4	若		49
50	206a5	未		50
51	206a8	乃		51
52	206a17	在		52
53	206a21	若		53
54	206a26	拘		54
55	206b1	種種	＊	55
56	206b4	是		56
57	206b7	佛		57
58	206b8	伽	注4	58～65
66	206b10	乃		66
67	206b11	過		67
68	206b12	乃		68

69	206b16	不		69
70	206b23	當		70
71	206c1	缺漏	*	71
72	206c8	慳		72
73	206c22	是時	*	73
74	207a9	娑		74
75	207a24	尋		75
76	207a26	所有	*	76
77	207b1	若		77
78	207b4	願		78
79	207b6	來世	*	79
80	207b7	若		80
81	207b9	我		81
82	207b10	十		82
83	207b13	其		83
84	207b14	爾		84
85	207b15	亦		85
86	207b15	若		86
87	207b18	我		87
88	207b19	所		88
89	207b21	若		89
90	207b23	我		90
91	207b27	我(1)		91
92	207b27	行		92
93	207b28	令		93
94	207b29	於		94
95	207c1	若		95
96	207c2	有		96
97	207c4	我		97
98	207c5	衆		98
99	207c6	我		99,(100)
100	207c8	處		101,(102)
101	207c9	見		103,(104)
102	207c10	為		105-1
103	207c11	我		105-2
104	207c11	衆		106
105	207c12	皆		107-1
106	207c13	説		107-2
107	207c14	欲	*	(107-3)?
108	207c19	我		108, 109
109	207c21	以		110-1

110	207c22	一(1)		110-2
110	207c23	我	注5	111
111	207c25	我(1)		112
112	207c26	若		113
113	207c28	縁		114, 115
114	207c29	若		?
115	208a3	若		?
116	208a4	若		116
117	208a14	或		(117)?
118	208a15	若	*	118
119	208a16	或		(119)?
120	208a17	若		120
121	208a19	若		(121)?
122	208a20	若		122
123	208a22	若		?
124	208a24	乃	*	124
125	208a24	我		125
126	208a27	世		126
127	208a28	及		127
128	208b1	世		128
129	208b3	我		129
130	208b5	我		130
131	208b5	成		131,(132)
132	208b7	如		?
133	208b8	我		133
134	208b10	一(1)		134
135	208b11	以		135
136	208b13	為		136
137	208b15	或		137
138	208b17	若		138
139	208b19	願		139
140	208b20	願		140
141	208b20	諸(3)		141
142	208b21	世		142
143	208b24	或		143
144	208b25	若		144
145	208b26	成		145
146	208c1	令		146
147	208c5	若		?
148	208c6	世		148
149	208c9	我		149

150	208c9	若		150
151	208c11	有		151
152	208c15	或		152
153	208c16	亦		153
154	208c16	願		154
155	208c18	世		155
156	208c20	若		156
157	208c22	事（2）		(157)?
158	208c23	世		158
159	208c29	於		159
160	209a1	現	＊	160
161			注6	
162	209a2	諸	＊	162
163	209a2	出		163
164	209a2	破		164
165	209a3	轉		165
166	209a3	般		166
			注7	
167	209a10	世尊	＊	167
168	209a11	或		168
169	209a12	或		169
170	209a13	或		170
171	209a15	若		171
172	209a16	若		172
173	209a18	若		173
174	209a19	若		174
175	209a20	若		175
176	209a21	若		176
177	209a23	若		177
178	209a24	若		178
179	209a26	若		179
180	209b1	若	＊	180
181	209b2	若		181
182	209b4	若		182
183	209b5	若		183
184	209b6	若		184
185	209b7	若		185
186	209b9	若		186
187	209b10	若		187
188	209b11	若		188
189	209b12	若		189

190	209b14	若		190
191	209b15	若		191
192	209b16	若		192
193	209b17	若		193
194	209b18	若		194
195	209b20	若		195
196	209b22	若		196
197	209b23	若		197
198	209b24	若		198
199	209b26	若		199
200	209b27	若		200
201	209b28	若		201
202	209c1	若		202
203	209c2	若		203
204	209c3	若		204
205	209c5	若		205
206	209c6	若		206
207	209c7	若		207
208	209c8	若		208
209	209c10	若		209
210	209c11	若		210
211	209c12	若	注8	?
211	209c14	若	注9	211
212	209c15	若		212
213	209c16	若		213
214	209c18	若		214
215	209c19	若		215
216	209c20	若		216
217	209c22	若		217
218	209c23	若		218
219	209c24	若		219
220	209c25	若		220
221	209c27	若		221
222	209c28	若		222
223	210a1	若		223
224	210a2	若		224
225	210a4	若		225
226	210a6	若		226
227	210a7	若		227
228	210a8	若		228
229	210a9	若		229

230	210a10	若		230
231	210a12	若		231
232	210a13	若		232
233	210a15	若		233
234	210a16	若		234
235	210a18	若		235
236	210a19	若		236
237	210a21	若		237
238	210a22	若		238
239	210a24	若		239
240	210a25	若		240
241	210a27	若		241
242	210a28	若		242
243	210b1	若		243
244	210b2	若		244
245	210b3	若		245
246	210b5	若		246
247	210b6	若		247
248	210b8	若		248
249	210b10	若		249
250	210b12	若		250
251	210b14	若		251
252	210b15	若		252
253	210b17	若		253
254	210b19	若		254
255	210b20	若		255
256	210b21	若		256
257	210b22	若		257
258	210b24	若		258
259	210b25	若		259
260	210b27	若		260
261	210b28	若		261
262	210c1	如		262
263	210c2	有		263
264	210c3	八		264
265	210c4	七		265
266	210c4	有		266
267	210c9	以		267
268	210c9	得		268
269	210c10	以		269
270	210c11	以		270

271	210c12	以		271
272	210c14	以		272
273	210c15	以		273
274	210c16	以		274
275	210c17	以		275
276	210c18	以		276
277	210c19	以		277
278	210c20	以		278
279	210c21	以（1）		279
280	210c21	以（2）		280
281	210c22	以		281
282	210c23	以		282
283	210c24	以		283
284	210c25	以		284
285	210c26	以（1）		285
286	210c26	以（2）		286
287	210c27	以		287
288	210c28	以		288
289	210c29	以		289
290	211a1	以		290
291	211a2	以		291
292	211a3	以		292
293	211a4	以（1）		293
294	211a4	以（2）		294
295	211a5	以		295
296	211a6	以		296
297	211a7	以		297, 298
298	211a10	以		299
299	211a12	若		300
300	211a14	以		301
301	211a16	世		302
302	211a17	乃		303, (304)
303	211a19	既		304
304	211a23	世		305
305	211a25	若		306
306	211a27	若		307
307	211a29	若		308
308	211b1	若		309
309	211b2	若		310
310	211b3	若		311
311	211b4	若		312

312	211b5	若		313
313	211b6	若		314
314	211b9	若		315
315	211b11	如	注１０	?
316	211b12	以		316～318
317	211b13	苦		319～322
318	211b15	比（１）		?
319	211b15	比（２）		?
320	211b15	優（１）		?
321	211b15	優（２）		?
322	211b15	若		323
323	211b16	乃		338, 但し, (324～337)は「乃至」に相当.
324	211b17	若		339
325	211b18	若		340
326	211b19	空		340, 341
327	211b22	無（１）		342～352, 但し, (344～351)は「乃至」に相当
328	211b23	世		353
			注１１	

注１：206a1「化」の上欄外に「第三十四天帝尺身」の書き入れ.
注２：206a2「鳥」の右傍に「第三十六四天王身」の書き入れ.
注３：206a2「願化」の下欄外に「第三十六以下十二」の書き入れ.
注４：「第五十八九六十六十一二三四五并（？）八願同事」の書き入れ.
注５：「第一百十願」はここで重複している.
注６：(209a1)「母胎」の右傍に「一百六十一取口（？）」
注７：巻末の経題の左傍に「第一百六十七以下願第七八巻有之（？）」の書き入れ.
注８：上欄外に「是願文有相違不可為一定」の書き入れ.
注９：朱書の「第二百十一願」は重複.
注１０：上欄外に「是中七願有相違可新（？）他本（？）」の書き入れ.
注１１：(211b26)の上欄外に「已下五十六願不會仍不付」の書き入れ.

（参考文献）

池上洵一　［1997］「東大寺図書館蔵『釈迦如来釈』── 解説と翻刻」『文化学年報』（神戸大学大学院文化学研究科）16: 111-160.

石上和敬　［1998］「『悲華経』から『釈迦如来五百大願経』へ」『北畠典生博士古稀記念論文集　日本仏教文化論叢』上巻（京都：永田文昌堂）723-738.

［1999］「Karuṇāpuṇḍarīka に見られる釈迦如来の五百願について」『仏教学』40: (85)-(107).

［2001］「高山寺蔵『釈迦如来五百大願』の二写本について」『印度学仏教学研究』49-2: (185-189).

［2009］「Karuṇāpuṇḍarīka の梵蔵漢資料」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』25: (1)-(42).

［2010］「〈悲華経〉の先行研究概観」『武蔵野大学仏教文化研究所紀要』26: (1)-(42).

桐野好覚　［1998］「『正法眼蔵』に引用される『悲華経』と『釈迦如来五百大願』について」『曹洞宗研究員　研究紀要』29: 73-89.

末木文美士［2001］「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願』の翻刻研究（一）」『平成十二年度　高山寺典籍文書綜合調査団　研究報告論集』23-40.

［2002］「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願』の翻刻研究（二）」『平成十三年度　高山寺典籍文書綜合調査団　研究報告論集』85-98.

［2003］「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願』の翻刻研究（三）」『平成十四年度　高山寺典籍文書綜合調査団　研究報告論集』15-26.

［2004］「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願』の翻刻研究（四）」『平成十五年度　高山寺典籍文書綜合調査団　研究報告論集』29-47.

［2005］「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願』と『悲華経』の比較対照」『平成十六年度　高山寺典籍文書綜合調査団　研究報告論集』(1)-(15).

杉本一樹　［1985］「聖語蔵経巻紀年銘集成（一）」『正倉院年報』7: 30-42.

成田貞観　［1963］「鎌倉期南都諸師の釈迦如来観と穢土成仏説の受容について」『印度学仏教学研究』11-2: 306-310.

［1979］「高山寺所蔵『釈迦如来五百大願経』の研究」『仏教大学大学院研究紀要』7: 1-71.

野村卓美　［2005］『中世仏教説話論考』（大阪：和泉書院）

牧野和夫　［1988］「『一切設利羅集』零本，影印・解説」『実践女子大学文芸資料研究所年報』7: 119-153.

蓑輪顕量　［1999］『中世初期　南都戒律復興の研究』（京都：法蔵館）

Yamada, Isshi

［1968］ *Karuṇāpuṇḍarīka, edited with Introduction and Notes*, vol.2 (London: School of Oriental and African Studies, University of London)

2010.1.30 稿

正倉院聖語蔵本，曇無讖訳『悲華経』に見られる朱筆の書き入れについて

いわがみ　かずのり　　武蔵野大学准教授

Notes on the Red Scripts in the *Beihuajing* 悲華経 Scrolls of Shōgozō Repository

Kazunori Iwagami

The aim of this paper is to provide information on the *Beihuajing* 悲華経 (Taishō Vol. 3, No. 157) scrolls in the Shōgozō Repository, which has been under the jurisdiction of The Office of the Shōsōin Treasure House (Imperial Household Agency, Japan).

The *Beihuajing*, translated by DharmakSema 曇無讖 in the early 5th century from the Sanskrit text *Karuṇāpuṇḍarika*, had circulated widely in the Heian and Kamakura periods in Japan. The Buddhists in those periods paid much attention, especially to Śākyamuni Buddha's 500 Vows contained in the *Beihuajing*. They also held in high regard the *Shijiarulai-wubaidayuan* 釈迦如来五百大願, which is an enlarged arranged version of the 500 Vows of the *Beihuajing*.

In the section of the 500 Vows in *Beihuajing* of the Shōgozō scrolls, we find that the numbers of the vows are written in red scripts on the right side margin of almost each line. The followings points have become clear when we compared these red scripts with the two complete manuscripts of the *Shijiarulai-wubaidayuan*, which are preserved at Kōzanji Temple in Kyoto and another related text, *Shijiarulai-shi* 釈迦如来釈, kept at the Tōdaiji Temple Library in Nara.

Firstly, the numbers of the vows written in red scripts in the *Beihuajing* of the Shōgozō scrolls correspond to the order of vows in the *Shijiarulai-wubaidayuan*. So we can deduce that the scribe who wrote the red scripts referred to one of the manuscripts of *Shijiarulai-wubaidayuan*.

Secondly, there are, however, some discrepancies between the numbers of the vows in red scripts found in the Shōgozō scrolls and those in the manuscripts of *Shijiarulai-wubaidayuan*, which are preserved in Kōzanji Temple. The scribe who wrote the red scripts must have consulted a manuscript of *Shijiarulai-wubaidayuan*, in which the vows are differently numbered. We can safely assume that there were several versions of *Shijiarulai-wubaidayuan* during that era.

Thirdly, some of Śākyamuni Buddha's 500 vows are cited with the numbers found in *Shijiarulai-shi*. We, thus, find that there is a close and interesting relation with regard to the numbers of the vows in red scripts between those of the Shōgozō scrolls and of *Shijiarulai-shi*.